

利益・コストの予期が大学生の要請希求に与える影響について -恋愛関係に着目して-

富永美咲¹⁾ 内海千種²⁾

On the Effectiveness of the Expected Benefits and Costs on the Desire for Help-seeking
in Romantic Relationship

Misaki TOMINAGA¹⁾ Chigusa UCHIUMI²⁾

Abstract

The purpose of the study is to consider the desire for help-seeking about moral harassment in romantic relationship. In the course of the study we focused on the magnitude relation between benefits and costs of help-seeking.

We have surveyed four-year college students ($N=206$) in Tokushima prefecture. They were all asked about i) their awareness of the severity of moral harassment, ii) their desire for help-seeking about moral harassment, and iii) the benefits and costs of help-seeking.

For every type of moral harassment, we examined how the desire for help-seeking can be influenced by the evaluation of the pros and cons of asking for help-seeking. As for the evaluation here, we calculated it from the benefits and the costs that help-seeking may have. In all cases, the severer they, i.e. the students in our survey, considered moral harassment to be, the stronger their desire for help-seeking tended to become. In cases of moral harassments by control and monitor, and by indirect attack as well, the evaluation of pros and cons had a positive influence on the desire for help-seeking, while, in cases of moral harassments by verbal attack, it seemed that the evaluation of pros and cons did not.

Having observed in the study as well as in the preceding studies that moral harassments by verbal attack particularly are more likely to be overlooked, we have thus come to believe that influence that the evaluation of pros and cons has on the desire for help-seeking will change from one harassment type to another.

KeyWords ; help-seeking, the benefits and costs, romantic relationship

¹⁾ 徳島大学大学院総合科学教育部

Faculty of Integrated Arts and Sciences, Tokushima University

²⁾ 徳島大学大学院総合科学研究部

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Tokushima University

問題と目的

1. 親密な二者関係での不当な行為

全国の20歳以上の男女の約5人に1人は配偶者から、約6人に1人は交際相手から身体的暴行、心理的攻撃、経済的圧迫、性的強要のいずれかの暴力を受けたことがある（内閣府男女共同参画局，2015）。内閣府男女共同参画局（2014）から、現在、日本においては、婚姻届を出した法律婚、婚姻届を出していない事実婚、生活の本拠を共にする交際関係においてパートナーから暴力を受けている者や、離婚・破局以前から引き続きパートナーからの暴力を受けている者が、配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関連する法律（DV防止法）の保護の対象となっている。

しかし、法的根拠のない恋愛関係におけるデート・バイオレンス（Dating Violence : DaV）については、法的根拠を持つ配偶者間の暴力等と違い、DVという用語をつけることであたかもDV防止法に適用するかなのような印象を受けるが、DV防止法で定める保護対象外となっている（富安・鈴井，2008）。そこで、若年における恋愛関係での暴力などの問題に焦点を当て、それら被害とその対処について検討する必要があると考えられる。

2. 恋愛関係でのモラル・ハラスメント

近年では、配偶者間や恋愛関係間という親密な二者関係で生じる暴力などに加えて、不当な行為としてモラル・ハラスメント（Moral Harassment）も注目されている。

Hirigoyen, M.F. (1998 高野優訳, 2011) は、「悪意をほのめかす」、「嘘をつく」、「ちょっとした言動で相手を辱める」などによるモラル・ハラスメントを一定期間繰り返すことによって、他者を深く傷つけ、心理的に破壊してしまうような人間関係が存在することを指摘している。モラル・ハラスメントは人を人と思わず、嘘をついたり、相手を操ろうとしたりすることから始まり、家庭でも職場でも、それが始まった段階で止めてしまわなければ、次第に悪辣なものになっていき、被害者の心の健康に重大な影響を及ぼす（Hirigoyen, M.F., 1998 高野優訳, 2011）。

Hirigoyen, M.F. (2001 高野優訳, 2012) が示した敵意のある言動リストの「コミュニケーションを拒否して相手を孤立させる言動」、「相手の尊厳を傷つける言動」、「言葉による暴力、肉体的な暴力、性的な暴力」に類似した行為は、内閣府男女共同参画局

（2015）の調査から、親密な二者関係でも心理的攻撃の一環として行われていると考えられる。恋愛関係でのDaVについて取り上げた先行研究（伊田，2010；山田・山田，2010；寺島・宇井・宮前・竹澤・松井，2013）においてもHirigoyen, M.F. (1998 高野優訳, 2011；2001 高野優訳, 2012) が述べるようなモラル・ハラスメントが含まれており、恋愛関係においても「悪意をほのめかす」、「嘘をつく」等といった他者を傷つける不当な行為が行われていることが推察される。越智・長沼・甲斐（2014）は、こうしたハラスメントは暴力と比べると問題が小さく思われがちであるが、それが蔓延しているだけに直接的な身体的暴力と比べても重要な社会問題であるとして、交際相手からもたれされるバイオレンス行為とハラスメント行為の両方に焦点を当て研究を行っている。しかし、越智ら（2014）のように、恋愛関係でのハラスメント行為にも着目した研究はあまり多くはない。また、寺島ら（2013）によって、DaVを受けた後の相談行動を含めた対処行動が異なることが示されている。

そこで、本研究では、これまでにあまり検討されていない恋愛関係でのモラル・ハラスメントについて取り上げ、その後の対処として他者への相談行動を取り上げる。また、恋愛関係でのモラル・ハラスメントを含むDaVが最もよく行われている年齢が10～20歳代であることから、青年期にある大学生を対象として調査を行う。大学生を対象とした牧野（2011）は、男性の59.4%、女性の78.7%が、これまでに異性と付き合ったことがあると報告している。牧野（2011）では、交際経験での性差についての有意性を検討していないもの、性別と交際経験の有無との間に関連がある可能性がある。

3. 援助要請

モラル・ハラスメントのような悩み事を抱えた時、「誰かに相談する」という相談行動も、援助要請の形態の1つであると考えられる。援助要請の典型的な例は、「個人が問題の解決の必要性があり、もし他者が時間、労力、ある種の資源を費やしてくれるのなら、問題が解決・軽減するようなもので、その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を要請する行動」である（DePaulo, B.M., 1983）。

先行研究をもとに、相川（1989）や高木（1997）は援助要請の生起過程について検

討し、援助要請の意思決定には援助を要請した時（要請）・要請しなかった時（非要請）のそれぞれに伴うと予想される利益・コストが関係すると考えている。利益とは、要請・非要請に伴うポジティブな結果である。一方、コストとは、要請・非要請に伴うネガティブな結果である。要請・非要請の利益・コストには、経済的・物質的側面と心理的側面とがあり、特に心理的側面における利益・コストが重要であると考えられている（相川，1989；高木，1997）。よって、本研究でも、援助要請に伴う利益・コストの心理的側面に着目していく。

潜在的な援助要請者は、要請・非要請に伴うと予想される利益・コストを全体的に検討し、援助要請の意思決定を行う（高木，1997）。相川（1989）は、援助要請が行われるのは要請のコストが要請の利益よりも小さく、非要請のコストが非要請の利益よりも大きい時であり、これらの大小関係が逆の場合には援助要請が行われずとしている。つまり、要請の利益・コストの大小関係と、非要請の利益・コストの大小関係から、援助要請を行うか否かが決定されると考えられている。

これまでにも、要請・非要請の利益・コストの援助要請に対する影響を検討した研究（永井・新井，2007；齊藤・永井，2015）はあるが、要請・非要請の利益・コストの大小関係から援助要請への影響を検討した先行研究を見つけることは叶わなかった。そこで、本研究では、要請の利益・コストの大小関係から算定される援助要請に対する意思を「要請意思」、非要請の利益・コストの大小関係から算定される援助要請に対する意思を「非要請意思」として捉え、検討する。相川（1989）や高野・宇留田（2002）から、「要請意思」は援助要請を行うことについて査定することで得られる為、援助要請に対して正の影響を持つと考えられる。一方で、「非要請意思」は援助要請を行わないことについて査定することで得られる為、援助要請に対して負の影響を持つと考えられる。

なお、本研究を行うに際して、有用な非要請の利益・コストに関する尺度を見つけることは叶わなかった。その為、まずは、要請の利益・コストに着目し、本田・石隈（2008）の援助評価尺度を用いて、恋愛関係でのモラル・ハラスメントに関する援助要請への「要請意思」の影響を検討する。

また、援助要請には、要請・非要請の利益・コスト以外にも、様々な変数が関連す

ると考えられている。文献研究により、水野・石隅（1999）は、援助要請に関する変数を大きく4つに分類している。1つ目は、デモグラフィック要因であり、これには性差、年齢、教育レベル、文化背景の違いが含まれる。2つ目はネットワーク変数であり、ソーシャルサポート、事前の援助体験の有無が含まれる。3つ目はパーソナリティ変数であり、自尊心や帰属スタイルが含まれる。4つ目は、個人の問題の深刻さ・症状である。これらのうち、本研究においては、性別と個人の問題の深刻さ・症状を取り上げる。水野ら（1999）によって、援助要請には性差があり、また個人の問題の深刻さ・症状の程度が高いほど、援助要請を行う可能性が高いとされる。恋愛関係において生じ得るモラル・ハラスメント等の悩み事についても、深刻であればある程、我々は周囲に助けを求める等の援助要請を行うことは容易に推察できる。よって、個人の問題の深刻さ、つまり悩みの深刻さは援助要請に対して正の影響を及ぼすと考えられる。

また、大学生においては、対人関係や恋愛・異性についての悩みでは相談相手として友人がより好まれるとされる（木村・水野，2004）。しかし、相談相手を限定したことによる援助要請への作用をさけるために、本研究では援助要請の相手を友人や、家族などと限定せずに、調査協力者にとって最も援助要請を行いやすい相手を想定してもらおうこととする。

4. 本研究の目的

Hirigoyen, M.F. (1998 高野優訳, 2011; 2001 高野優訳, 2012) が述べるようなモラル・ハラスメントは、日本でも恋愛関係などの親密な二者関係で起こっていると考えられる。こうしたモラル・ハラスメント含む心理的攻撃は、10~20歳代に交際相手から行われた暴力として最も多い（内閣府男女共同参画局，2015）。しかし、交際相手から暴力を受けた者の約45%が、親密な関係にあるパートナーからの暴力について、どこにも相談を行っていない（内閣府男女共同参画局，2015）。このことから、恋愛関係における不当な行為は周囲への相談行動、つまり援助要請が行われにくいことが考えられる。

そこで、本研究では、恋愛関係で起こり得る不当な行為として、モラル・ハラスメントを取り上げ、まずは援助要請への希求（要請希求）について検討する。恋愛関係

でのモラル・ハラスメントについて、要請の利益・コストの大小関係から算定される要請意思について着目しながら、要請意思の要請希求への影響について検討することを本研究の目的とする。これにより、恋愛関係における不当な行為についての援助を求めようとする際に、期待される、あるいは懸念されるものについて検討していく。仮説は、以下の通りである。

仮説1：恋愛関係でのモラル・ハラスメントについては、要請意思は要請希求に正の影響を及ぼす。

仮説2：恋愛関係でのモラル・ハラスメントは悩みの深刻さは、要請希求に正の影響を及ぼす。

本研究では仮説を検証するにあたり、Figure.1のようにモデルを設定した。まず、性別と交際経験の有無を外生変数とし、それらの間に相関関係を設定した。次に、深刻さ得点と要請意思得点を設定した。そして、最後に、従属変数として要請希求得点を設定した。

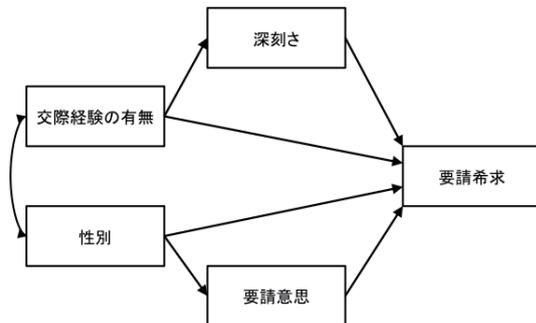


Figure.1 仮説モデル

方法

1. 実施期間

2015年12月下旬から2016年1月上旬にかけて、大学の講義時間の一部を利用して頂き、質問紙調査を実施した。

2. 調査対象者

徳島県内の4年制大学へ通う者のうち、精神科等への通院歴のない、青年期にある大学生206名を対象に調査を実施した（回収率99.515%）。調査協力に同意しなかったものや、途中で回答を止めたもの、青年期に属さないものを除いた169名（男性67名、女性100名、性別不明2名、平均年齢20.056歳、 $SD=0.974$ ）分のデータを分析に用いた。

3. 調査手続

心理学をはじめとする調査研究の学びに関連のある講義終了後に、質問紙による調査を行った。本研究の概要や手続、研究協力の任意性、研究への参加・不参加が講義の成績には関係がないことなどを説明した上で、調査協力者の自由意志による研究への協力を求めた。なお、調査協力者が質問紙を裏返して提出しても、回答した内容が周囲に見えないように、質問紙の最後は白紙にした。なお、本調査は、平成2015年度徳島大学総合科学部の倫理審査委員会の承認を受けて行われた（受付番号92、承認日2015年12月9日）。

4. 質問紙の構成

質問紙は、大きく以下の1)~4)で構成されている。

1) フェイスシート

調査協力意思の有無、年齢、性別、交際経験の有無について尋ねた。なお、本研究においては、交際経験の有無を「法的婚姻関係にないパートナーがいた・いる経験」とした。

2) モラル・ハラスメントの深刻さ

恋愛関係で起こり得るモラル・ハラスメントとして、デートバイオレンス・ハラスメント尺度（越智ら、2014）のうち、「間接的暴力」6項目、「支配・監視」14項目、「言語的暴力」6項目の計26項目を取り上げた。

同尺度（越智ら、2014）は、恋愛関係で起こり得る暴力とハラスメントの両方を含む。そのため、心理学を専攻する大学院生・大学生と、研究実施者の計8名が同尺度（越智ら、2014）から、モラル・ハラスメントと考えられる計26項目を選出した。これら項目の選出は、Hirigoyen, M.F. (2001 高野優訳, 2012) の敵意ある言動リストに合致する、個々人がモラル・ハラスメントであると感じるという視点から行われた。計26項目の各項目について、8名の一致率は85%を上回っていた。なお、各項目中の交際相手や異性友人などの表現を、パートナーやパートナーと同性の人などと統一した。

交際しているパートナーから繰り返し行われるモラル・ハラスメント計26項目について想定してもらい、それら行為が調査協力者にとってどのくらい深刻な悩みになるかを5件法（「1：深刻でない」～「5：深刻である」）で尋ねた。得点の範囲は、26～130点である。分析には、悩みの深刻さの素点から算出したZ得点を用いた。

交際しているパートナーから繰り返し行われるモラル・ハラスメント計 26 項目について想定してもらい、それら行為が調査協力者にとってどのくらい深刻な悩みになるかを 5 件法（「1：深刻でない」～「5：深刻である」）で尋ねた。得点の範囲は、26～130 点である。分析には、悩みの深刻さの素点から算出した Z 得点を用いた。

Table.1 恋愛関係において起こり得るモラル・ハラスメント

1.コミュニケーションを拒否して相手を孤立させる言動
標的にした相手が話そうとすると、話をさえぎる。 相手に話しかけない。 メモや手紙、メールなど、書いた物だけで意思を伝える。 目も合わせないなど、あらゆるコンタクトを避ける。 仲間ははずれにする。 一緒にいても他の人たちだけに話しかけて、存在を無視する。 標的にした相手と話すことを他の人たちに禁じる。 他の人と話すのを許さない。 話し合いの要求に応じない。
2.相手の尊厳を傷つける言動
侮辱的な言葉で相手に対する評価を下す。 ため息をつく、馬鹿にしたように見る、肩をすくめるなど、軽蔑的な態度をとる。 標的にした相手について、周りの人の信用を失われるようなことを言う。 悪い噂を流す。 精神的に問題がよくなことを言う。 身体的な特徴や障害をからかったり、その真似をしたりする。 私生活を批判する。 出自や国籍をからかう。 信仰している宗教や政治的信条を攻撃する。 相手が屈辱だと感じることをさせる。 猥褻な言葉や下品な言葉で相手を罵る。
3.言葉による暴力、肉体的な暴力、性的な暴力
殴ってやると言って、相手を脅す。 わざとぶつかったりなど、例え軽いものであっても肉体的な攻撃を加える。 目の前でボタンとドアを閉める。 大声でわめいたり、怒鳴りつける。 頻りに電話をかけたリ手紙を書いたりして、私生活に侵入する。 道であとをつける、家の前で待ち伏せをする。 言葉や態度でセクシャル・ハラスメントを行う、性的な暴力を加える。 相手の健康上の問題を考慮に入れない。

Hirigoyen, M.F. (2001 高橋優訳, 2012)より作成。

3)モラル・ハラスメントに関する要請希求
交際しているパートナーから繰り返し行われるモラル・ハラスメント計 26 項目について想定してもらい、それら行為について調査協力者が最も相談しやすい相手に相談するか否かを 5 件法（「1：相談しない」～「5：相談する」）で尋ねた。得点の範囲は、26～130 点である。分析には、要請希求の素点から算出した Z 得点を用いた。

4)要請希求に伴う利益・コスト
要請希求に伴う利益・コストの予期について測定するため、援助評価尺度(本田ら, 2008)を用いた。この尺度は、「他者からの支えの知覚」6 項目、「問題状況の改善」6 項目、「対処の混乱」6 項目、「他者への依存」5 項目の計 23 項目からなる。これらのうち、援助要請のポジティブな結果を示すことから「他者からの支えの知覚」と「問題状況の改善」を要請の利益として、ネガティブな結果を示すことから「対処の混乱」と「他者への依存」を要請のコストとして

捉えることが可能であると考えた。なお、利益・コストの予期を尋ねるにあたって、各項目の文末表現を変更した。

恋愛関係でのモラル・ハラスメントについて、調査協力者が最も相談行動を行いやすい相手に相談する際に予期する利益・コストについて 4 件法（「1:当てはまらない」～「4:当てはまる」）で尋ねた。得点の範囲は、23～92 点である。分析には、利益・コストの素点から算出した Z 得点を用いた。

5. データ分析方法

本研究において、統計処理およびモデルの検討は、IBM SPSS Statistics ver.20, および IBM SPSS Amos ver.20 を用いて行った。統計学的有意水準は、両側 5 %未満とした。

結果

1. 各尺度の因子の検討

調査協力に同意しなかったものや、途中で回答を止めたものなどを除いた 169 名（男性 67 名、女性 100 名、性別不明 2 名、平均年齢 20.06 歳、 $SD=0.97$ ）分のデータを分析に用いた。この 169 名のデータには、欠損値を含むものが存在した。そこで、質問ごとに欠損値を含むデータを除いて、各質問の因子の検討を行った。いずれについても、0.350 以上の因子負荷量を持たない項目、2 つ以上の因子に 0.350 以上の因子負荷量を持つ項目を削除し、因子の分析を行った。

1)モラル・ハラスメントの深刻さについて
デートバイオレンス・ハラスメント(越智ら, 2014)の計 26 項目の行為について、交際しているパートナーから繰り返し行われることを想定してもらい、それが調査協力者にとってどのくらい深刻な悩みであるかを 5 件法で尋ねた。

デートバイオレンス・ハラスメント尺度(越智ら, 2014)は、今まで男性との交際経験のある全国の大学院生・大学生の女性(平均年齢 21.16 歳、 $SD=1.578$)を対象に調査を行い、作成されたものである。本研究では、その尺度の一部(計 26 項目)を用い、また青年期にある男性・女性の大学生を対象としたため、因子に含まれる項目や、因子構造が異なる可能性が考えられた。そこで、デートバイオレンス・ハラスメント尺度(計 26 項目)について、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、固有値が 1.000 以上の 3 因子 24 項目が抽出された(Table.2)。

第1因子は「パートナーへのLINEの返事が遅かったり、既読なのに返事を送らなかったとして腹を立てられる」など、デートバイオレンス・ハラスメント尺度(越智ら, 2014)の下位因子「支配・監視」の項目を多く含んだことから、支配・監視の深刻さ(14項目)と名付けた。第2因子は『ブサイク』などとわざと自分が嫌がる呼び方で呼ばれる」など、元の尺度の下位因子「言語的暴力」に含まれる項目からなることから、言語的攻撃の深刻さ(6項目)と名付けた。第3因子は「パートナーにものを投げつけられる」など、元の尺度の下位因子「間接的暴力」に含まれる項目からなることから、間接的攻撃の深刻さ(4項目)と名付けた。

各因子の内的整合性を確認するために、 α 係数を算出したところ、支配・監視の深刻さ($\alpha=0.960$)、言語的攻撃の深刻さ($\alpha=0.920$)、間接的攻撃の深刻さ($\alpha=0.946$)であった。なお、因子間相関については、支配・監視の深刻さ-言語的攻撃の深刻さ($r=0.605$)、支配・監視の深刻さ-間接的攻撃の深刻さ($r=0.629$)、言語的攻撃の深刻さ-間接的攻撃の深刻さ($r=0.646$)で、それぞれ相関がややあることが確認された。2)要請希求について

モラル・ハラスメントの深刻さと同様に、デートバイオレンス・ハラスメント尺度(越智ら, 2014)の計26項目について、交際しているパートナーから繰り返し行われることを想定してもらい、そのことについて調査協力者にとって最も相談しやすい相手に相談するか否かを5件法で尋ねた。

要請希求の測定にも、デートバイオレンス・ハラスメント尺度(越智ら, 2014)の計26項目を用いた為、先のモラル・ハラスメントの深刻さと同様に、因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行った。その結果、固有値が1.000以上の3因子24項目が抽出された(Table.3)。

第1因子は「パートナーに、パートナーと同性の友人との付き合い(会うことや話すこと)を制限される」など、デートバイオレンス・ハラスメント尺度(越智ら, 2014)の下位因子「支配・監視」の項目を多く含んでいたことから、支配・監視についての要請希求(14項目)と名付けた。第2因子は『痩せる』など、体型のことにに関して口を出される」など、元の尺度の下位因子「言語的暴力」の項目からなることから、言語的攻撃についての要請希求(6項目)と名付けた。第3因子は「パートナーにものを投げつけられる」など、元の尺度の下位因

Table.2 深刻さについての因子の検討

項目	支配・監視	言語的暴力	間接的攻撃	共通性
20 パートナーへのLINEの返事が遅かったり、既読なのに返事を送らなかったとして腹を立てられる	0.911	0.064	-0.193	0.679
18 自分がパートナーと同性的な人と一緒にいたり話したりすることに嫉妬される	0.897	0.050	-0.159	0.839
19 行き先を告げさせられたり報告させられる	0.845	0.135	-0.150	0.896
11 一日に何回もメールや電話をされる	0.832	-0.009	-0.205	0.869
9 パートナーへのメールの返信や電話が少し遅れると腹を立てられる	0.824	-0.042	0.047	0.561
15 「パートナーとあいつ(人、もの、ことがら)のどっちが大事なんだ」という言い方をされる	0.792	0.045	0.057	0.636
13 頻繁に電話やメールをされて、自分が誰に会っているのかや自分の行動を確認される	0.791	-0.153	0.248	0.639
14 パートナーに、パートナーと同性的な友人との付き合い(会うことや話すこと)を制限される	0.761	-0.116	0.179	0.687
16 少し連絡が取れないだけで浮気を疑われる	0.752	0.042	0.136	0.512
17 パートナーからの大量のメールを頻繁に送られる	0.740	0.021	0.009	0.513
8 用事があって会えなかった場合などに、パートナーを優先しないと怒られる	0.737	0.116	-0.020	0.762
7 交友関係や行動をチェックされる	0.691	-0.050	0.197	0.663
10 勝手に携帯のメールや着信履歴を見られる	0.495	0.001	0.290	0.735
6 パートナーに自分を所有物のように扱われる	0.481	0.077	0.282	0.761
23 「ブサイク」などわざと自分が嫌がる呼び名で呼ばれる	-0.113	0.880	0.095	0.575
21 パートナーに馬鹿にされたり、見下されるような言い方をされる	-0.006	0.845	0.023	0.697
24 「痩せる」など、体型のことにに関して口を出される	0.103	0.787	-0.147	0.707
22 人前で恥をかかされたり、馬鹿にされる	-0.069	0.742	0.205	0.705
25 自分と他の同性的な人や以前の交際相手を比較される	0.093	0.675	0.073	0.733
26 パートナーの趣味に合わない髪型や服装だと、馬鹿にされたり文句を言われる	0.197	0.642	0.030	0.715
3 パートナーにものを投げつけられる	0.018	-0.016	0.946	0.770
2 大声で怒鳴りつけられたり、叫ばれたり、罵られる	-0.057	0.104	0.882	0.581
1 殴るそぶりや、ものを投げつけるふりをしておどかされる	-0.163	0.062	0.877	0.617
4 机や壁を殴る、蹴るなどしてパートナーから脅かされる	0.109	0.020	0.846	0.637
因子寄与	11.813	8.999	9.274	
因子寄与率(%)	0.492	0.375	0.386	

Table.3 要請希求についての因子の検討

項目	支配・監視	言語的攻撃	間接的攻撃	共通性
14 パートナーに、パートナーと同性の友人との付き合い(会うことや話すこと)を制限される	0.911	-0.350	0.133	0.657
10 勝手に携帯のメールや着信履歴を見られる	0.859	-0.125	0.068	0.801
11 一日に何回もメールや電話をされる	0.852	-0.046	0.011	0.882
13 頻繁に電話やメールをされて、自分が誰に会っているのかや自分の行動を確認される	0.839	-0.171	0.149	0.863
12 携帯の電話帳やメールを消せと命令される	0.799	-0.139	0.173	0.604
16 少し連絡が取れないだけで浮気を疑われる	0.760	0.110	-0.013	0.612
9 パートナーへのメールの返信や電話が少し遅れると腹を立てられる	0.750	0.272	-0.187	0.702
8 用事があって会えなかった場合などに、パートナーを優先しないと怒られる	0.717	0.241	-0.114	0.751
18 自分がパートナーと同性の人と一緒にいたり話したりすることに嫉妬される	0.715	0.213	-0.212	0.665
15 「パートナーとあいつ(人, もの, ことがら)のどっちが大事なんだ」という言い方をされる	0.698	0.239	-0.088	0.687
17 パートナーからの大量のメールを頻繁に送られる	0.665	0.060	0.112	0.646
19 行き先を告げさせられたり報告させられる	0.649	0.317	-0.116	0.660
7 交友関係や行動をチェックされる	0.640	0.081	0.158	0.626
24 「痩せろ」など、体型のことに口を出される	-0.027	0.900	-0.056	0.687
26 パートナーの趣味に合わない髪型や服装だと、馬鹿にされたり文句を言われる	0.085	0.857	-0.039	0.686
21 パートナーに馬鹿にされたり、見下されるような言い方をされる	-0.072	0.839	0.127	0.584
23 「ブサイク」などわざと自分が嫌がる呼び名で呼ばれる	-0.128	0.821	0.229	0.611
22 人前で恥をかかされたり、馬鹿にされる	-0.139	0.805	0.204	0.691
25 自分と他の同性や以前の交際相手を比較される	0.207	0.689	0.004	0.750
6 パートナーに自分を所有物のように扱われる	0.323	0.457	0.117	0.712
3 パートナーにものを投げつけられる	0.083	0.014	0.891	0.778
4 机や壁を殴る、蹴るなどしてパートナーから脅かされる	0.102	0.016	0.869	0.731
2 大声で怒鳴りつけられたり、叫ばれたり、罵られる	0.006	0.166	0.794	0.702
1 殴るそぶりや、ものを投げつけるふりをしておどかされる	-0.063	0.157	0.750	0.798
因子寄与	11.331	9.946	6.825	
因子寄与率(%)	0.472	0.414	0.284	

子「間接的暴力」からなることから、間接的攻撃についての要請希求(4項目)と名付けた。

各因子の内的整合性を確認するために α 係数を算出したところ、支配・監視についての要請希求($\alpha=0.957$)、言語的攻撃についての要請希求($\alpha=0.941$)、間接的攻撃についての要請希求($\alpha=0.943$)であった。なお、要請希求の因子間相関については、支配・監視についての要請希求-言語的攻撃についての要請希求($r=0.636$)、支配・監視についての要請希求-間接的攻撃についての要請希求($r=0.452$)、言語的攻撃についての要請希求-間接的攻撃についての要請希求($r=0.519$)で、それぞれ相関がややあることが確認された。

また、深刻さ、要請希求についての因子の検討から、本研究での恋愛関係におけるハラスメントの因子の構造は、越智ら(2014)のデートバイオレンス・ハラスメント尺度とおおよそ同じであることが確認された。

3)要請希求に伴う利益・コストについて

恋愛関係でのモラル・ハラスメントについて、調査協力者が最も相談行動を行いやすい相手に相談する際に予期する利益・コストについて4件法で尋ねた。

利益・コストの予期の測定に用いた、援

助評価尺度(本田ら, 2008)は、大学生においても実施されている(齊藤ら, 2015)ものの、元は中学生を対象とした調査から作成されたものである。その為、大学生を対象とした本研究では因子に含まれる項目や、因子構造が異なる可能性が考えられた。そこで、利益・コストの予期に対しても、同様に因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果、固有値が1.000以上の4因子20項目が抽出された(Table.4)。

第1因子は「自分がどうすればいいかが余計に分からなくなる」など、援助評価尺度(本田ら, 2008)の下位因子「対処の混乱」に含まれる項目からなることから、対処の混乱(6項目)と名付けた。第2因子は「悩んだ時にはこうすればいいというやり方が分かる」など、元の尺度の下位因子「問題状況の改善」の項目からなることから、問題状況の改善(6項目)と名付けた。第3因子は「自分が他の人に頼りすぎていると思う」など、元の尺度の下位因子「他者への依存」の項目からなることから、他者への依存(5項目)と名付けた。第4因子は「自分の味方をしてくれる人がいると思う」など、元の尺度の下位因子「他者からの支えの知覚」の項目からなることから、他者からの支えの知覚(3項目)と名付け

Table.4 利益・コストの予期についての因子の検討

	対処の混乱	問題状況の改善	他者への依存	他者からの支えの知覚	共通性
16 自分がどうすればいいかが余計に分からなくなる	0.934	-0.072	-0.188	0.120	0.810
15 他の人の意見にふりまわされる	0.805	-0.002	-0.057	0.099	0.811
14 自分の意見が消されてしまう	0.654	0.077	0.185	0.010	0.544
18 相談する前よりもっと悩む	0.621	0.013	0.099	-0.034	0.491
13 馬鹿にされると思う	0.616	0.073	0.136	-0.178	0.506
17 裏切られると思う	0.499	0.032	0.183	-0.213	0.731
9 悩んだ時にはこうすればいいというやり方が分かる	0.016	0.912	-0.035	-0.180	0.551
7 どうすればいいかがはっきりする	-0.092	0.702	0.026	-0.027	0.335
10 なぜ上手くいかないのかが分かる	0.028	0.700	0.073	0.113	0.374
8 自分の気持ちの入れかえができる	0.029	0.691	-0.036	0.037	0.580
11 悩みが小さくなる	0.023	0.507	-0.009	0.140	0.612
12 自分の考えとは違ういろいろな考えに気付く	0.032	0.479	-0.092	0.199	0.570
19 自分が他の人に頼りすぎていると思う	-0.095	0.035	0.977	-0.005	0.658
20 自分が甘えていると思う	-0.022	0.045	0.908	-0.004	0.502
22 自分にはできないことがたくさんあると思う	0.073	-0.055	0.571	0.154	0.487
23 相談した相手に迷惑をかけると思う	0.156	-0.071	0.495	0.073	0.829
21 自分が何もかも悪いと思う	0.292	-0.114	0.472	-0.031	0.787
1 自分の味方をしてくれる人がいると思う	0.026	-0.027	0.063	0.928	0.549
2 自分のことを分かってくれる人がいると思う	0.027	0.054	0.060	0.893	0.373
3 自分にはいい相談相手がいると思う	-0.039	0.105	-0.001	0.678	0.374
因子寄与	4.836	3.510	4.725	3.240	
因子寄与率	0.242	0.175	0.236	0.162	

た。

利益・コストの予期の各因子の内的整合性を確認するために α 係数を算出したところ、対処の混乱 ($\alpha=0.875$)、問題状況の改善 ($\alpha=0.842$)、他者への依存 ($\alpha=0.856$)、他者からの支えの知覚 ($\alpha=0.885$)であった。各因子の因子間相関は、対処の混乱-問題状況の改善 ($r=-0.110$)、対処の混乱-他者への依存 ($r=0.678$)、対処の混乱-他者からの支えの知覚 ($r=-0.200$)、問題状況の改善-他者への依存 ($r=-0.181$)、問題状況の改善-他者からの支えの知覚 ($r=0.424$)、他者への依存-他者からの支えの知覚 ($r=-0.237$)であった。よって、対処の混乱-他者への依存の間と、問題状況の改善-他者からの支えの知覚の間でやや相関がみられ、それ以外では相関は殆どみられなかった。また、本研究での利益・コストの予期の因子構造は、本田ら(2008)とおおよそ同様の因子構造であることが確認された。

2. 性別や交際経験の有無による差の検討

共分散構造分析によるモデルの検討を行う前に、欠損値のない138名(男性53名、女性85名、平均年齢20.04歳、 $SD=0.91$)分のデータについて、以下の検討を行った。

1) 交際経験における性差について

138名について、交際経験について性差があるかを検討するために、 X^2 乗検定を行った(Table.5)。その結果、男女における

交際経験の有無に差は認められなかった($X^2=1.033$, *n.s.*, $\phi=.1.033$)。

Table.5 交際経験における性差について

	男性	女性	合計	ϕ
交際経験 なし	12	26	38	1.033
あり	41	59	100	
合計	53	85	138	

2) 各変数の性差について

各変数の性差を検討するため、 t 検定を行った(Table.6)。 t 検定には、深刻さ(全体、支配・監視、言語的攻撃、間接的攻撃)、要請希求(全体、支配・監視、言語的攻撃、間接的攻撃)、問題状況の改善、他者からの支えの知覚、対処の混乱、他者への依存の12の変数を取り上げた。

性差を検討した結果、要請希求全体 ($t=-2.886$, $p=0.005$, *Cohen's d*=0.505)、言語的攻撃についての要請希求 ($t=-3.342$, $p=0.001$, *Cohen's d*=0.585)、間接的攻撃についての要請希求 ($t=-4.258$, $p<0.001$, *Cohen's d*=0.821)、他者からの支えの知覚 ($t=-2.798$, $p=0.006$, *Cohen's d*=0.490)、対処の混乱 ($t=3.550$, $p=0.001$, *Cohen's d*=0.621) で性差がみられた。また、間接的攻撃についての要請希求でのみ、等分散が仮定されなかった。これら5つの変数にお

Table.6 各変数の性差

	男性 n=53		女性 n=85		t	Cohen's d
	Mean	SD	Mean	SD		
深刻さ	48.802	7.925	50.747	11.079	-1.112	0.195
支配・監視	49.101	8.577	50.561	10.804	-0.833	0.146
言語的攻撃	48.509	8.541	50.93	10.755	-1.388	0.243
間接的攻撃	49.01	9.172	50.617	10.489	-0.918	0.161
要請希求	46.969	8.936	51.89	10.21	-2.886**	0.505
支配・監視	48.598	8.655	50.874	10.71	-1.304	0.228
言語的攻撃	46.524	10.065	52.168	9.381	-3.342**	0.585
間接的攻撃	45.292	11.648	52.936	7.51	-4.258***	0.821
問題状況の改善	48.224	10.327	51.107	9.687	-1.658	0.29
他者からの支えの知覚	47.056	11.353	51.835	8.627	-2.798**	0.49
対処の混乱	83.857	10.514	77.891	8.99	3.550**	0.621
他者への依存	51.807	9.577	48.874	10.147	1.687	0.295

** $p<0.01$, *** $p<0.001$

Table.7 各変数の交際経験による差

	なし n=38		あり n=100		t	Cohen's d
	Mean	SD	Mean	SD		
深刻さ	52.903	6.407	48.897	10.889	2.661**	0.406
支配・監視	52.49	6.988	49.054	10.81	1.819	0.347
言語的攻撃	53.269	7.991	48.758	10.434	2.408*	0.459
間接的攻撃	51.904	7.215	49.276	10.817	1.384	0.264
要請希求	51.454	9.358	49.447	10.224	1.053	0.201
支配・監視	50.834	9.797	49.683	10.106	0.602	0.115
言語的攻撃	51.466	9.969	49.443	10.005	1.062	0.202
間接的攻撃	52.158	8.37	49.18	10.476	1.571	0.299
問題状況の改善	51.608	9.705	49.389	10.09	1.166	0.222
他者からの支えの知覚	51.685	7.834	49.36	10.675	1.222	0.233
対処の混乱	80.194	9.663	80.178	10.173	0.009	0.002
他者への依存	48.939	9.342	50.403	10.255	-0.767	0.146

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

いて、Cohen's dの値の範囲は0.490~0.821で、いずれの変数でも中等度、もしくは高い効果量がみられた。平均値から、要請希求（全体、言語的、間接的）、他者からの支えの知覚は女性の方が高く、その差の効果は中等度以上である。また、対処の混乱は男性の方が高く、その差の効果についても中等度である。

3)各変数の交際経験による差について

各変数の交際経験による差を検討するため、先と同様の12の変数を用いて、t検定を行った（Table.7）。各変数の得点は、Z得点を用いた。

交際経験による差を検討した結果、深刻さ全体（ $t=2.661$, $p=0.009$, Cohen's d

=0.406）、言語的攻撃による悩みの深刻さ（ $t=2.408$, $p=0.017$, Cohen's d=0.459）で差がみられた。Cohen's dの値の範囲は0.406~0.459で、いずれの変数についても小さい効果量がみられた。平均値から、悩みの深刻さ全体、言語的攻撃の深刻さについては交際経験があると得点が低くなることが確認された。

3. 各変数の相関関係の検討

各変数の相関関係について分析を行った（Table.8）。

まず、悩みの深刻さについて、悩みの深刻さ全体は、支配・監視の深刻さ、言語的攻撃の深刻さ、間接的攻撃の深刻さ、要

Table.8 各変数における相関関係

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1 深刻さ	-	0.949**	0.831**	0.801**	0.368**	0.343**	0.325**	0.250**	0.191*	0.112	0.026	-0.033
2 支配・監視		-	0.646**	0.650**	0.340**	0.391**	0.214**	0.174*	0.217*	0.108	0.019	-0.035
3 言語的攻撃			-	0.667**	0.414**	0.283**	0.524**	0.289**	0.131	0.119	0.082	0.001
4 間接的攻撃				-	0.162	0.061	0.188*	0.285**	0.078	0.048	-0.054	-0.058
5 要請希求					-	0.925**	0.876**	0.709**	0.388**	0.432**	0.062	0.002
6 支配・監視						-	0.67**	0.494**	0.398**	0.395**	0.067	-0.003
7 言語的攻撃							-	0.605**	0.284**	0.353**	0.086	0.025
8 間接的攻撃								-	0.263**	0.366**	-0.043	-0.025
9 問題状況の改善									-	0.471**	-0.127	-0.178*
10 他者からの支えの知覚										-	-0.208*	-0.163
11 対処の混乱											-	0.642**
12 他者への依存												-

* $p<0.05$, ** $p<0.01$

請希求全体, 支配・監視についての要請希求, 言語的攻撃についての要請希求, 間接的攻撃についての要請希求, 問題状況の改善との間で有意な正の相関がみられた. 支配・監視の深刻さは, 言語的攻撃の深刻さ, 間接的攻撃の深刻さ, 要請希求全体, 支配・監視についての要請希求, 言語的攻撃についての要請希求, 間接的攻撃についての要請希求, 問題状況の改善との間で有意な正の相関がみられた. 言語的攻撃の深刻さは, 間接的攻撃の深刻さ, 要請希求全体, 支配・監視についての要請希求, 言語的攻撃についての要請希求, 間接的攻撃についての要請希求と有意な正の相関がみられた. 間接的攻撃の深刻さは, 言語的攻撃についての要請希求, 間接的攻撃についての要請希求との間で, 有意な正の相関がみられた.

次に要請希求について, 要請希求全体は, 支配・監視についての要請希求, 言語的攻撃についての要請希求, 間接的攻撃についての要請希求, 問題状況の改善, 他者からの支えの知覚との間で有意な正の相関がみられた. 支配・監視についての要請希求は, 言語的攻撃についての要請希求, 間接的攻撃についての要請希求, 問題状況の改善, 他者からの支えの知覚との間で有意な正の相関がみられた. 言語的攻撃についての要請希求は, 間接的攻撃についての要請希求, 問題状況の改善, 他者からの支えの知覚と有意な正の相関がみられた. 間接的攻撃の要請希求は, 問題状況の改善, 他者からの支えの知覚との間で有意な正の相関がみられた.

最後に, 要請希求に伴う利益・コストについて, 問題状況の改善は, 他者からの支えの知覚と正の相関が, 他者への依存と負の相関がみられた. 他者からの支えの知覚は, 対処の混乱との間で有意な負の相関がみられた. 対処の混乱は, 他者への依存との間で有意な正の相関がみられた.

4. 援助希求に伴う利益・コストについて

問題状況の改善と他者からの支えの知覚との間で中等度の正の相関 ($r=0.471$, $p<0.010$) がみられ, また対処の混乱と他者への依存との間で中等度の正の相関 ($r=0.642$, $p<0.010$) がみられた. よって, 当初想定していた通りに, 問題状況の改善と他者からの支えの知覚を要請希求に伴う利益として, 対処の混乱と他者への依存を要請希求に伴うコストとして取り扱うこととした. 利益は, 問題状況の改善の素点, 他者からの支えの知覚の素点を合計し, Z得点を算出したものとした. コストも同様に, 対処の混乱の素点, 他者への依存の素点を合計し, Z得点を算出したものとした.

本研究では, 要請意思による要請希求への影響を検討することを目的としていた. 利益からコストを差し引いたものを要請意思 (利益-コスト) として扱い, 要請希求への影響をモデル検討することにした. また, より細かく要請意思から要請希求への影響を検討するため, 利益の下位尺度からコストの下位尺度を各々差し引いて, 問題状況の改善から対処の混乱を差し引いた要請意思 (改善-混乱), 問題状況の改善から他者への依存を差し引いた要請意思 (改善-依存), 他者からの支えの知覚から対処の混乱を差し引いた要請意思 (支え-混乱), 他者からの支えの知覚から他者への依存を差し引いた要請意思 (支え-依存) を算出し, 分析に用いた.

利益, コスト, 各々の要請意思の7つの変数における性差, 交際経験による差を検討するため, t 検定を行った.

性差の検討を行った結果, コストを除いた, 利益 ($t=-2.366$, $p=0.019$, *Cohen's* $d=0.414$), 要請意思 (利益-コスト) ($t=-3.447$, $p=0.001$, *Cohen's* $d=1.344$), 要請意思 (改善-混乱) ($t=-3.503$, $p=0.001$, *Cohen's* $d=3.444$), 要請意思 (改善-依存) ($t=-2.195$, $p=0.030$, *Cohen's* $d=1.209$), 要請意思 (支え-混乱) ($t=-4.180$, $p=0.0005$,

Table.9 利益・コストと要請意思の性差

	男性 n=53		女性 n=85		t	Cohen's d
	Mean	SD	Mean	SD		
利益	47.491	10.249	51.564	9.572	-2.366 *	0.414
コスト	53.049	10.024	48.099	9.559	2.904	0.508
要請意思(利益-コスト)	-5.558	14.541	3.466	15.212	-3.447 **	1.344
(改善-混乱)	-35.633	14.077	-26.783	14.650	-3.503 **	3.444
(改善-依存)	-3.583	14.719	2.234	15.393	-2.195 *	1.209
(支え-混乱)	-36.800	16.058	-26.056	13.769	-4.180 ***	3.599
(支え-依存)	-4.750	15.225	2.962	14.585	-2.971 **	1.347

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$, *** $p < 0.001$

Table.10 利益・コストと要請意思の交際経験による差

	なし n=38		あり n=100		t	Cohen's d
	Mean	SD	Mean	SD		
利益	51.877	9.279	49.287	10.215	1.363	0.260
コスト	49.436	9.663	50.214	10.165	-0.408	0.078
要請意思(利益-コスト)	2.441	16.337	-0.928	15.210	1.139	0.271
(改善-混乱)	-28.586	16.025	-30.789	14.652	0.769	0.147
(改善-依存)	2.669	15.599	-1.014	15.208	1.262	0.241
(支え-混乱)	-28.509	15.171	-30.818	15.712	0.778	0.148
(支え-依存)	2.746	14.959	-1.043	15.305	1.307	0.249

$Cohen's d=3.599$), 要請意思(支え-依存) ($t=-2.971$, $p=0.004$, $Cohen's d=1.347$) で性差がみられた (Table.9). 性差について, $Cohen's d$ は全て中等度以上の値を示した. 平均値から利益, 全ての要請意思について女性の方が高い値を示すことが示された.

また, 交際経験による差について検討した結果, どの変数においても有意な差はみられなかった (Table.10).

5. 要請希求への影響についてのモデル検討

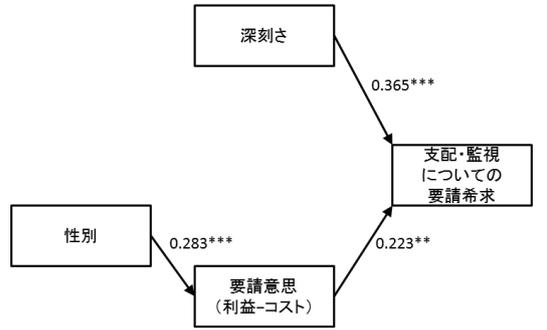
最後に, Figure.1 に示したモデルの検討を行った. 深刻さ, 要請希求についての因子分析から, 本研究で取り上げた恋愛関係でのモラル・ハラスメントの内容は大きく3つに分類することができると考えられる. そこで, モデル検討を行うにあたり, 支配・監視, 言語的攻撃, 間接的攻撃といったモラル・ハラスメントの種類ごとに検討することとした. 以降では, 深刻さ得点(支配・監視, 言語的攻撃, 間接的攻撃), 要請希求得点(支配・監視, 言語的攻撃, 間接的攻撃), 要請意思得点(利益-コスト, 改善-混乱, 改善-依存, 支え-混乱, 支え-依存)の各々を組み合わせることで, モデルの検討を行った.

なお, t 検定の結果から, 性差のみられる変数が存在した. しかし, 本研究では男女別にモデルを検討するのに十分なデータを集めることは叶わなかった. そこで, 男性を0, 女性を1とする性別のダミー変数を用いた. さらに, 交際経験なしを0, 交際経験ありを1とする交際経験のダミー変数を用いた. 以下では, モラル・ハラスメントの種類ごと(支配・監視, 言語的攻撃, 間接的攻撃)に, 交際経験の有無, 征伐, 悩みの深刻さ, 各要請意思, 要請希求に関するモデルを検討した結果を示す.

1) 支配・監視によるモラル・ハラスメント
支配・監視によるモラル・ハラスメントについては, 5つのモデルが示された.

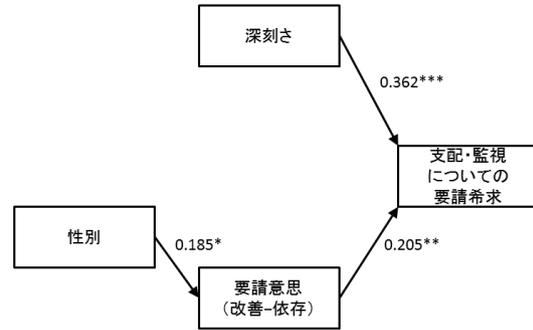
まず, 要請意思(利益-コスト)を取り扱ったモデル (Figure.2) では, 性別から要請意思(利益-コスト)に正のパスがみられた. 深刻さ, 要請意思(利益-コスト)からは, 要請希求にそれぞれ正のパスがみられた. また, パス係数から要請意思(利益-コスト)よりも深刻さの方が大きな影響を与えていた.

このモデルの適合度は, $CMIN=2.853$, $df=3$ ($n.s.$), $GFI=0.990$, $AGFI=0.966$, $CFI=1.000$, $RMSEA<0.001$ で, 比較的よい適合度が得られた.



CMIN=2.853, df=3 (n.s.), GFI=0.990, AGFI=0.966, CFI=1.000, RMSEA<0.001

Figure.2 支配・監視による
モラル・ハラスメントについて 1

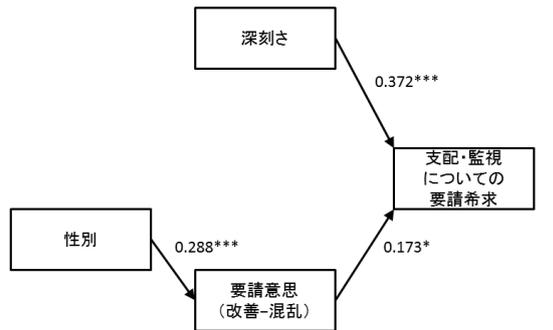


CMIN=4.384, df=3 (n.s.), GFI=0.984, AGFI=0.948, CFI=0.957, RMSEA=0.058

Figure.4 支配・監視による
モラル・ハラスメントについて 3

次に、要請意思（改善-混乱）を取り扱ったモデル（Figure.3）においても、性別から要請意思（改善-混乱）に正のパスがみられた。深刻さ、要請意思（改善-混乱）からは、要請希求にそれぞれ正のパスがみられた。また、パス係数から要請意思（改善-混乱）よりも深刻さの方が大きな影響を与えていた。

このモデルの適合度は、 $CMIN=2.799$, $df=3$ (n.s.), $GFI=0.990$, $AGFI=0.967$, $CFI=1.000$, $RMSEA<0.001$ で、比較的よい適合度が得られた。



CMIN=2.799, df=3 (n.s.), GFI=0.990, AGFI=0.967, CFI=1.000, RMSEA<0.001

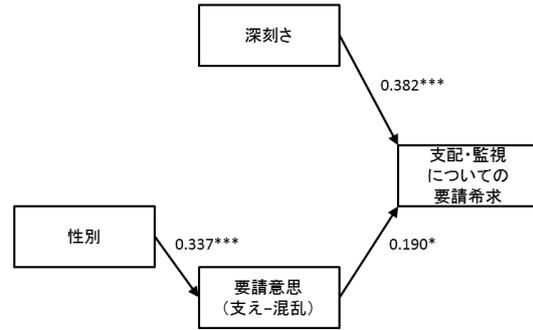
Figure.3 支配・監視による
モラル・ハラスメントについて 2

3つ目に、要請意思（改善-依存）について取り扱ったモデル（Figure.4）においても、性別から要請意思（改善-依存）に正のパスがみられた。深刻さ、要請意思（改善-依存）からは、要請希求にそれぞれ正のパスがみられた。また、パス係数から要請意思（改善-依存）よりも深刻さの方が大きな影響を与えていた。

このモデルの適合度は、RMSEA の値が.050 より大きいものの、 $CMIN=4.384$, $df=3$ (n.s.), $GFI=0.984$, $AGFI=0.948$, $CFI=0.957$, $RMSEA=0.058$ で、比較的よい適合度が得られた。

4つ目に、要請意思（支え-混乱）を取り扱ったモデル（Figure.5）においても、性別から要請意思（支え-混乱）に正のパスがみられた。深刻さ、要請意思（支え-混乱）からは、要請希求にそれぞれ正のパスがみられた。また、パス係数から要請意思（支え-混乱）よりも深刻さの方が大きな影響を与えていた。

このモデルの適合度は、 $CMIN=0.946$, $df=3$ (n.s.), $GFI=0.997$, $AGFI=0.989$, $CFI=1.000$, $RMSEA<0.001$ で、比較的よい適合度が得られた。



CMIN=.946, df=3 (n.s.), GFI=0.997, AGFI=0.989, CFI=1.000, RMSEA<0.001

Figure.5 支配・監視による
モラル・ハラスメントにについて 4

最後に、要請意思（支え-依存）を取り扱ったモデル（Figure.6）においても、性別から要請意思（支え-依存）に正のパスがみられた。深刻さ、要請意思（支え-依存）からは、要請希求にそれぞれ正のパスがみられた。また、パス係数から要請意思（支え-依存）よりも深刻さの方が大きな影響を与えていた。

このモデルの適合度は、 $CMIN=1.697$, $df=3$ (n.s.), $GFI=0.994$, $AGFI=0.980$, $CFI=1.000$, $RMSEA<0.001$ で、比較的よい適合度が得られた。

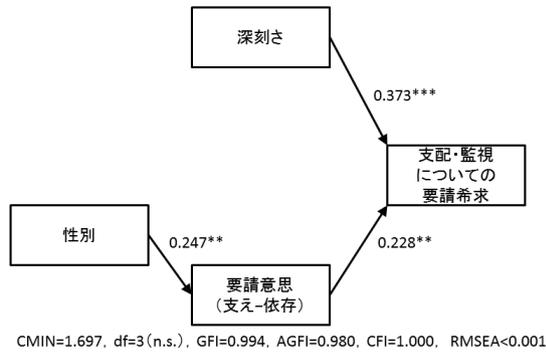


Figure.6 支配・監視によるモラル・ハラスメントについて 5

よって、支配・監視によるモラル・ハラスメントについては、いずれのモデルにおいても深刻さと要請意思の各々から要請希求への正の影響がみられることが確認された。

2) 言語的攻撃によるモラル・ハラスメント
言語的攻撃によるモラル・ハラスメントについても、性別、深刻さ、それぞれの要請意思、要請希求を投入した。しかし、いずれの要請意思からも、要請希求への影響はみられなかった (Figure.7)。

言語的攻撃によるモラル・ハラスメントについては、交際経験の有無から深刻さへ負の影響、深刻さから要請希求に正の影響がみられた。また、性別から要請希求に正の影響がみられた。パス係数から、言語的攻撃によるモラル・ハラスメントについては、性別よりも、モラル・ハラスメントを深刻さの方が大きな影響を与えていた。

このモデルの適合度は、 $CMIN=2.672$, $df=3$ (n.s.), $GFI=0.990$, $AGFI=0.986$, $CFI=1.000$, $RMSEA<0.001$ で、比較的よい適合度が得られた。

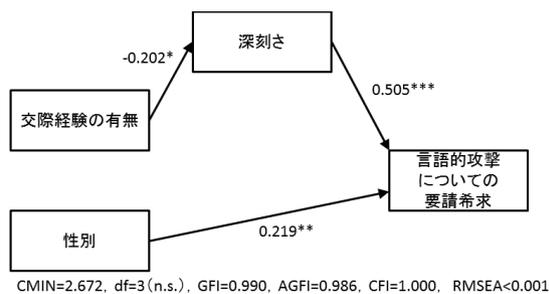


Figure.7 言語的攻撃によるモラル・ハラスメントについて

3) 間接的攻撃によるモラル・ハラスメント
間接的攻撃によるモラル・ハラスメントについては、要請意思 (支え-依存) からのみ要請希求への影響がみられた (Figure.8)。

性別から要請意思 (支え-依存) に正のパスがみられた。性別、深刻さ、要請意思 (支え-依存) からは、要請希求にそれぞれ正のパスがみられた。また、パス係数から性別が要請希求に対して最も大きな影響を与えていた。

このモデルの適合度は、 $CMIN=1.216$, $df=2$ (n.s.), $GFI=0.996$, $AGFI=0.978$, $CFI=1.000$, $RMSEA<0.001$ で、比較的よい適合度が得られた。

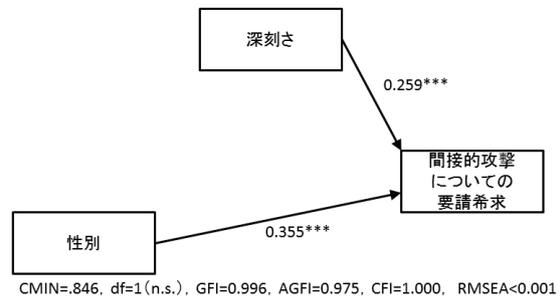


Figure.8 間接的攻撃によるモラル・ハラスメントについて

以上から、支配・監視によるモラル・ハラスメント、間接的攻撃によるモラル・ハラスメントについては、要請意思から要請希求に対して正の影響がみられた。よって、仮説 1 は一部のモラル・ハラスメントにおいて支持された。また、今回取り扱った支配・監視、言語的攻撃、間接的攻撃によるモラル・ハラスメントにおいて、深刻さからも要請希求へ正の影響がみられた。よって、仮説 2 はすべてのモラル・ハラスメントにおいて支持された。

考察

1. 深刻さ・要請希求の因子の検討

本研究においては、深刻さ、要請希求の測定に、越智ら (2014) のデートバイオレンス・ハラスメント尺度から選出した計 26 項目を用いた。深刻さ、要請希求のそれぞれについて因子分析を行ったところ、共に十分な α 係数を有する 3 因子計 24 項目が抽出された。しかし、同様の項目を用いたにも関わらず、深刻さ、要請希求の各々の因子に含まれる項目が異なっていた。

まず、深刻さ、要請希求では共に、項目 5 「意に沿わないからと言ってにらまれる」が削除された。項目 5 は、双方とも、いずれの因子についても因子負荷量が 0.350 以下であり、説明力が低かった為に削除することとなったと考えられる。

深刻さに関する因子の検討において、項

目 12「携帯の電話帳やメールを消せと命令される」は、支配・監視の深刻さ、間接的攻撃の深刻さの 2 つの因子に対して 0.350 以上の因子負荷量を持っていたことから削除した。また、要請希求に関する因子の検討において、項目 20「パートナーへの LINE の返事が遅かったり、既読なのに返事を送らなかったとして腹を立てられる」も、支配・監視についての要請希求、言語的攻撃についての要請希求に対して 0.350 以上の因子負荷量を持っていたことから削除した。しかし、項目 12 は要請希求では支配・監視についての要請希求に、項目 20 は深刻さでは支配・監視の深刻さに含まれている。

虐待、いじめ、ハラスメントなどの類語より、包括的な意味合いで使われてきた暴力について、藤本（2005）は、暴力は加害者が意図を持って行うものであり、被害者が暴力と感じれば、負傷の深淺や心理的侵襲の大小に関わらず、暴力と定義されてよいとしている。このことから、モラル・ハラスメントを含むハラスメントについても、それを受けた人が「ハラスメントである」と感じれば、負傷や心理的侵襲の大小に関わらず、当該行為が個人にとってのハラスメントであると定義されてよいと考えられる。Hirigoyen, M.F. (1998 高野優訳, 2011) は、悪意をほのめかしたり、嘘をついたり、ちょっとした言葉で相手を辱めたり、とモラル・ハラスメントを行う方法はたくさんあるとしている。よって、モラル・ハラスメントを行う方法が多岐に渡ることから、1 つのモラル・ハラスメント行為が、支配・監視、言語的攻撃、間接的攻撃によるモラル・ハラスメントのいずれに分類されるのかも、個人によって異なることが推察される。このことから、項目 12、項目 20 で示されるような行為は、個人にとって分類の異なりやすいモラル・ハラスメントであった可能性がある。そのため、これらの項目は各々、2 因子に対する因子負荷量が 0.350 以上となり、削除することになったと推察する。

2. 要請希求への影響についての検討

支配・監視、言語的攻撃、間接的攻撃のそれぞれによるモラル・ハラスメントについて得られたモデルについて考察する。

1) 支配・監視によるモラル・ハラスメント

支配・監視によるモラル・ハラスメントについては、次のような結果が得られた。

まず、深刻さから要請希求に正の影響がみられた。よって、支配・監視によるモラ

ル・ハラスメントが深刻であるほど、要請希求が高まると考えられる。これは、水野ら（1999）の問題が深刻であるほど援助要請を行いやすいという指摘に一致する。よって、支配・監視のモラル・ハラスメントにおいても、深刻さの程度が高いほど、要請希求が高まると考えられる。

次に、性別から各々の要請意思に正の影響がみられた。本研究において、各変数の精査を検討した際に、5 つの要請意思に性差があることが確認されている。平均値の値から、いずれの要請意思についても、男性と比べて女性の方が高かった (Table.9)。水野ら（1999）の女性の方が援助要請に肯定的な態度を示すという指摘もあり、本研究においても女性の方がより要請意思が高くなることが示唆された。

また、5 つの要請意思から要請希求に正の影響がみられた (Figure.2, 3, 4, 5, 6)。相川（1989）や高野ら（2002）から、要請意思は援助要請を行うことについて査定することで得られるものであるため、援助要請に対して正の影響を及ぼしたと考えられる。また、本研究においては、質問紙調査において、恋愛関係でのモラル・ハラスメントについて、調査協力者が最も相談行動を行うやすい相手に相談する際に予期する利益・コストについて回答を求めた。回答者にとって、この設問の表記、および利益・コストの予期の各質問項目は、他者への相談行動をすることを前提としたものであった。そのため、要請意思から要請希求に正の影響がみられた可能性がある。

本研究において、男性・女性ともに支配・監視についての要請希求では正の値を示した (Table.6)。しかし、男性ではすべての要請意思において負の値を、女性では要請意思 (改善-混乱)、要請意思 (支え-混乱) でのみ負の値を示している (Table.9)。このことから、要請の利益よりも要請のコストの方が大きい場合であっても、要請希求に正の影響を与えていると解釈できる。本研究では、要請の利益・コストの大小関係にのみ着目しており、非要請の利益・コストの影響を検討できていない。相川（1989）や高木（1997）は、援助要請・非要請に伴う利益・コストを全体的に検討した上で、援助の要請・非要請の意思決定が行われるとしている。相川（1989）では要請のコストが要請の利益よりも小さく、非要請のコストが非要請の利益よりも大きい時に、また、高木（1997）では非要請コストが要請コストよりも大きく、また、要請の利益が

非要請の利益よりも大きい時に、援助要請が行われるとされている。相川（1989）や高木（1997）が述べる通りであるならば、援助を要請するか否かは、要請に伴う利益・コスト、非要請に伴う利益・コストの大小関係の相互作用の影響を受けると考えられる。しかし、本研究では、要請の利益・コストの大小関係にのみ着目しており、非要請の利益・コストの影響については着目できていない。そのため、要請・非要請の利益・コストの大小関係の兼ね合いについては検討できていない。よって、本研究において、負の値を示した、つまり要請のコストが大きい要請意思が要請希求に正の影響を及ぼしたのは、非要請の利益・コストの査定である非要請意思との相互作用が関係している可能性もある。先行研究においても、要請の利益・コストから援助要請に対する単独の影響を検討しており（永井ら、2007；齊藤ら、2015）、要請・非要請の利益・コストの大小関係から算定される要請・非要請意思から援助要請への影響について検討するものは見つけることが叶わなかった。よって、今後の課題としては、非要請の利益・コストの大小関係にも着目し、要請・非要請の利益・コストの大小関係の相互作用から、要請希求、ないしは援助要請への影響を検討する必要がある。要請・非要請の利益・コストの大小関係の両方に着目することによって、援助要請の意思決定について更に知見を深めることが可能であると推察される。

また、要請意思よりも深刻さの方が、パス係数が大きかった。よって、支配・監視によるモラル・ハラスメントについて、深刻さの方が要請希求により強く影響を及ぼすことが示唆された。

2) 言語的攻撃によるモラル・ハラスメント

言語的攻撃によるモラル・ハラスメントにおいて、交際経験の有無が深刻さに負の影響を及ぼしていた。交際経験があることで、言語的攻撃によるモラル・ハラスメントは恋愛では当然のことであるという考えがより起こり、悩みの深刻さが低くなると考えられる。これは、伊田（2010）においても、同様のことが指摘されている。よって、言語的攻撃によるモラル・ハラスメントについて、交際経験があることで悩みの深刻さは低く見積もられる可能性がある。

また、性別、深刻さから要請希求に正の影響がみられた。先の支配・監視によるモラル・ハラスメントと同様に、言語的攻撃によるモラル・ハラスメントにおいても、

女性の方が要請希求が高くなり、またモラル・ハラスメントを深刻であると捉えるほど要請希求が高まると推察される。

また、言語的攻撃によるモラル・ハラスメントについては、一貫して要請意思から要請希求へ影響はみられなかった。寺島ら（2013）は、大学生を対象に、恋人からなされた行為と、その後の対処について検討している。寺島ら（2013）は恋人からされた「浮気」、「見下し」、「コントロール」、「身体的暴力」、「趣味・主張の押しつけ」、「第三者への気のある素振り」、「第三者への迷惑行為」といった行為については、「説得する」、「受け流す」、「第三者と相談（話す）」といった対処が取られることを示唆している。本研究の言語的攻撃によるモラル・ハラスメントにおいても、寺島ら（2013）でみられたような「見下し」、「コントロール」、「趣味・主張の押しつけ」、「第三者への気のある素振り」を取り扱った項目がある。また、伊田（2010）は、従来のカップル単位の恋愛観では、嫉妬心や独占欲を持つことは肯定的に許容され、束縛や干渉や依存は愛情そのものだと思われ、相談するほどのことではないと捉えられていると指摘している。寺島ら

（2013）や伊田（2010）から、本研究で取り扱った言語的攻撃によるモラル・ハラスメントについては、相手を説得したり、行為を受け流したりといった対処が取られ、またカップルという親密な二者関係ではよく起こり得ることで周囲に相談するほどのことでもないと思えられがちであることが考えられる。このことから、言語的攻撃によるモラル・ハラスメントについては、要請意思が喚起されにくくなったために、要請意思を含まないモデルが得られたと考える。

3) 間接的攻撃によるモラル・ハラスメント

間接的攻撃によるモラル・ハラスメントについては性別、深刻さから要請希求に正の影響がみられた。よって、支配・監視、言語的攻撃によるモラル・ハラスメントと同様に、間接的攻撃によるモラル・ハラスメントについても、女性の方が要請希求が高くなり、モラル・ハラスメントを深刻であると捉えられるほど、要請希求が高まると考えられる。

また、間接的攻撃によるモラル・ハラスメントについては、要請意思（支え-依存）のみ、性別から正の影響を受けていた。要請意思（支え-依存）は、他者からの支えの知覚、他者への依存に含まれる項目から、

相談相手に肯定的に受け入れられるか否か、他者に頼り過ぎていないかどうかに着目した要請意思であると解釈できる。このことから、間接的攻撃については、相談をする際に、他者に肯定的に受け入れられるかどうか、また他者に頼り過ぎていないかどうかという点に着目しやすい傾向があることが示唆された。また、寺島ら（2013）は、物を壊すことも含めた「身体的暴力」という恋人からされた行為に対しては、「第三者と相談（話す）」という対処が行われることを示唆している。寺島ら（2013）でみられたような行為が含まれていることから、本研究で取り上げた間接的攻撃によるモラル・ハラスメントについても、友達や家族に相談したり話を聞いてもらうといった対処が行われる傾向があると考えられる。そのため、相談相手となる他者について検討する要請意思（支え-依存）からのみ、要請希求への影響がみられたと考える。

また、今回は、男性・女性を区別せずにモデルの検討を行ったが、男性については、要請意思（支え-依存）において負の値を示している（Table.9）。先に述べた通り、今回は要請の利益・コストに着目できておらず、非要請の利益・コスト、また要請・非要請意思の相互作用については検討できていない。今後は、非要請の利益・コストにも着目し、要請・非要請の利益・コストの大小関係の相互作用についても検討する必要がある。また、要請意思（支え-依存）では、男女で平均値に差がみられ、値の正負も異なっていた（Table.9）。今後は、非要請意思に着目すると同時に、援助要請の意思決定における性差についても検討することが課題である。

本研究の限界・今後の課題

以下では、本研究の限界と、今後の課題について述べる。

まず、1点目は、十分なサンプル数を集めることが叶わなかったことである。そのため、本研究の結果は、恋愛関係でのモラル・ハラスメントに関する要請希求でみられる傾向や可能性に過ぎない。また、援助要請の志向性を含めた援助要請には性差があることが指摘されており（水野ら，1999）、本研究においても要請希求、要請意思において効果量が中等度以上の性差が確認された。しかし、サンプル数が十分でなく、男女別に要請希求に関するモデルの検討を行うことができなかった。

また、支配・監視によるモラル・ハラス

メントでは性別から要請意思、要請意思から要請希求へそれぞれパスがみられた。その一方で、言語的攻撃、間接的攻撃によるモラル・ハラスメントにおける特定のモデル（Figure.7, 8）でのみ、性別から要請希求に直接的にパスがみられた。これらのことから、性別が要請意思を介して要請希求に影響を与える可能性と性別が直接的に要請希求に影響を与える可能性の2つが考えられる。しかし、これら可能性の一方が妥当であるのか、両方の可能性があるのかは定かではない。これについても、サンプル数を増やすことで、性別そのものの影響であるかどうかを検討できると考えられる。さらに、水野ら（1999）でも述べられている通り、援助要請には様々な要因が関連している。今後、援助要請に関する、例えば自尊心などの別の要因を取り上げることで、要請希求への影響を更に検討できると考えられる。そのため、今後の課題としてはサンプル数を増やし、男女別に恋愛関係でのモラル・ハラスメントに関する要請希求について検討すること、援助要請に関連する別の要因を踏まえて検討することの必要性があると考えられる。

2点目は、本研究が取り上げたのが、要請の利益・コストのみであったことである。本研究では恋愛関係でのモラル・ハラスメントについて、要請の利益・コストの大小関係を示す要請意思が要請希求に及ぼす影響については検討したが、非要請の利益・コストの大小関係を示す非要請意思から要請希求については検討をしていない。よって、利益・コストの観点から援助要請について検討した時、本研究で検討することができたのは要請の利益・コストという側面についてのみに過ぎない。潜在的援助要請者は、要請・非要請に伴うと予想される利益・コストを全体的に検討し、援助要請の意思決定を行う（高木，1997）とされる。本研究においても、得られた結果から、要請意思については、非要請意思との相互作用から、さらに要請希求、援助要請への影響を検討する必要がある。しかし、先行研究では要請の利益・コストについての尺度が作成されている（本田ら，2008；永井ら，2007）ものの、非要請の利益・コストやその大小関係について、十分な信頼性・妥当性を有する尺度を見つけることは叶わなかった。そこで、今後の課題としては、要請・非要請の利益・コストの両方について測定できる尺度を作成すること、また要請・非要請の利益・コストの両方の観点から、恋

愛関係によるモラル・ハラスメントに関する援助要請について検討することがあげられる。

また、利益・コストや要請意思において性差が認められた (Table.9)。このことから、性別によって、援助希求に伴って期待することや懸念することに傾向がある可能性がある。そのため、要請・非要請の利益・コストの性別による特徴にも着目することも今後の課題となり得る。

最後に、本研究では、要請意思や性別等から援助要請の希求への影響について検討したに過ぎない。今後は、援助を求める希求性から、援助要請行動への影響について検討する必要がある。引き続き利益・コストの観点から援助要請に検討することで、援助の要請・非要請についての意思決定の過程や、援助を求める際に期待されること、また懸念されることについての検討への一助になると考える。

謝辞

本論文の Abstract に関して、ご多忙にも関わらず、ご指導くださいました藤木厚年先生に、心より深く御礼申し上げます。

<付記>本論文は、平成 27 年度に徳島大学総合科学部に学士論文として提出したものに加筆・修正を行ったものである。

引用文献

相川充 (1989) . 援助行動, 大坊郁夫・安藤清志・池田謙一 (編) 社会心理学パースペクティブ 1 個人から他者へ 誠信書房, 291-311.

DePaulo, B.M. (1983) . Perspectives on Help-seeking. DePaulo, B.M., Nadler, A., & Fisher, J.D. (Eds) , New Directions in Helping. Volume 2 Help-seeking. New York : Academic Press. pp. 3-12.

Hirigoyen, M.F. (1998) Le harcèlement moral. La violence perverse au quotidien. Paris : La Découverte et Syros. (高野優 (訳) (2011) . モラル・ハラスメント第 16 版 紀伊国屋書店.) .

Hirigoyen, M.F. (2001) Malaise au travail. Harcèlement moral: démêler le vrai du faux. Paris : La Découverte et Syros. (高野優 (訳) (2012) . モラル・ハラスメントが人も会社もダメにする第 4 版 紀伊国屋書店.) .

本田真大・石隈利紀 (2008) . 中学生の援助に対する評価尺度 (援助評価尺度) の作成 学校心理学研究 8 (1) , 29-39.

藤本修 (編) (2005) . 暴力・虐待・ハラスメント人はなぜ暴力をふるうのか ナカニシヤ出版.

伊田広行 (2010) . デート DV と恋愛 大月書店.

木村真人・水野治久 (2004) . 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて—, カウンセリング研究 37 (3) , 260-269.

牧野幸志 (2011) . 青年期における恋愛と性行動に関する研究 (2) 経営情報研究 19 (1) , 41-56.

水野治久・石隈利紀 (1999) . 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究 47 (4) , 530-539.

永井智・新井邦二郎 (2007) . 利益とコストの予期が中学生における友人への援助要請に与える影響の検討 教育心理学研究 55 (2) , 197-207.

内閣府男女共同参画局 (2015) . 男女間における暴力に関する調査 (平成 26 年度調査報告書前文) 「女性に対する暴力」に関する調査研究

<http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/h26_boryoku_cyousa.html, 2015.12.26 閲覧>.

内閣府男女共同参画局 (2014) . 配偶者暴力防止法<

<http://www.gender.go.jp/e-vaw/law/index2.html>> (2015.12.26) .

越智啓太・長沼里美・甲斐恵利奈 (2014) . 大学生に対するデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成 法政大学文学部紀要 (69) , 63-74.

齊藤翔悟・永井智 (2015) . 援助要請における援助者の応答が援助評価と援助要請意図に与える影響 立正大学心理学研究年報 (6) , 67-73.

高木修 (1997) . 援助行動の生起過程に関するモデルの提案 関西大学社会学部紀要 29 (1) , 1-21.

高野明・宇留田麗 (2002) . 援助要請行動から見たサービスとしての学生相談 教育心理学研究 50 (1) , 113-125.

寺島瞳・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・松井めぐみ (2013) . 大学生におけるデート DV の実態の把握—被害者の対処および別れない理由の検討— 筑波大学心理学研究 (45) , 113-120.

富安俊子・鈴木江三子（2008）．ドメスティック・バイオレンスとデートDVの相違および支援体制の課題 川崎医療福祉学会誌 18（1），65-74.

山田典子・山田真司（2010）．高校生のDating violenceの特性と課題，母性衛生 51（2），311-319.

（受付日2016年9月30日）

（受理日2016年9月30日）